

平成27年度 第2回 太平洋いわし類・マアジ・さば類長期漁海況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産総合研究センター
中央水産研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し(平成28年1月~6月)のポイント

海況

黒潮は、平成28年2月上旬にC型^(※1)からN型^(※1)になる。沿岸水温は、潮岬以西が「**平年並**」^(※2)~「**高め**」^(※2)、熊野灘~伊豆諸島北部海域では概ね「**平年並**」で暖水波及時に「**高め**」、房総沿岸域~常磐南部海域が「**平年並**」~「**やや高め**」^(※2)で推移する。

※1 黒潮を遠州灘沖から伊豆諸島周辺海域の流路で分類する

C型：八丈島の南を通過

N型：八丈島の北を通過、南端が北緯33度以北

別添中央ブロック海況予報の図1を御参照ください。

※2 平年並=平年値±0.5℃程度、

やや高め=平年値+1.0℃程度、高め=平年値+1.5℃程度

漁況(来遊量予測)

マイワシ

1歳魚主体に前年を上回る海域が多い。

カタクチイワシ

前年を下回る海域が多い。

ウルメイワシ

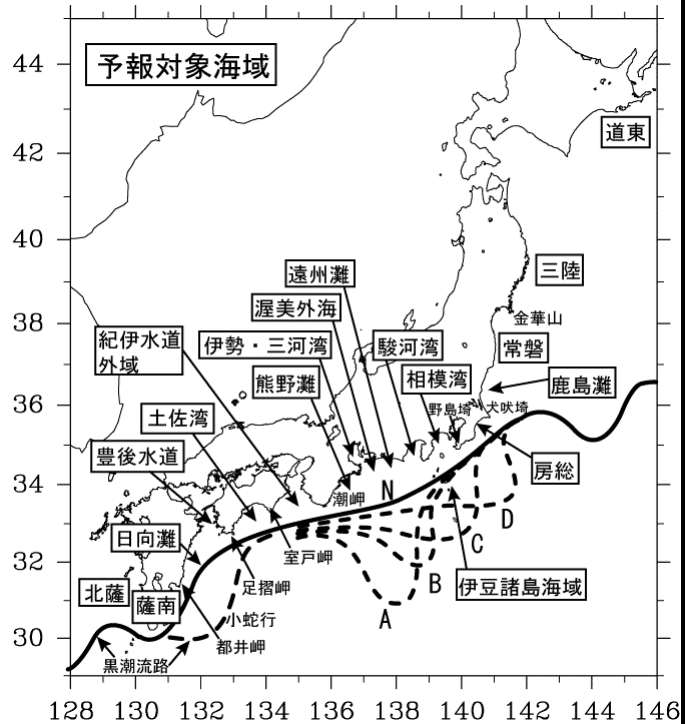
前年並~上回る海域が多い。

マアジ

前年並~下回る。

マサバ・ゴマサバ

マサバは伊豆諸島以西では前年を上回り、
犬吠以北では多かった前年並~下回る。
ゴマサバは前年を上回る海域もあるが、
前年並~下回る。



問い合わせ先

国立研究開発法人水産総合研究センター 中央水産研究所

担当：市橋、川崎

電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.fra.go.jp/>

<http://nrifs.fra.affrc.go.jp/>

中央ブロック海況予報

今後の見通し（2016年1月～6月）

(1) 黒潮（注：黒潮流型は図1を参照のこと）

◎潮岬以西

- ・都井岬～潮岬沖では、接岸傾向が続く。

◎潮岬以東

- ・1月はC型で経過する。
- ・2月上旬にN型となり、以降N型基調で推移する。
- ・房総沖では、1月は離接岸を繰り返すが、2月以降は接岸傾向になる。

(2) 薩南～房総沿岸域

- ・潮岬以西では、黒潮の離接岸による一時的な暖水波及がある。
- ・熊野灘～遠州灘～伊豆諸島北部海域は、概ね冷水域となるが、一時的な暖水波及がある。
- ・伊豆諸島南部海域は、2月上旬までは冷水域に、以降は概ね暖水域に覆われる。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・房総沖での黒潮の離接岸に伴い暖水が波及する。

(4) 沿岸水温

- ・潮岬以西は、「平年並」～「高め」で推移する。
- ・熊野灘～遠州灘～伊豆諸島北部海域は、概ね「平年並」で推移する。暖水波及に伴い「高め」となることがある。
- ・伊豆諸島南部海域は、2月上旬までは「低め」、以降は概ね「高め」で推移する。
- ・房総沿岸域～鹿島灘～常磐南部海域は、「平年並」～「やや高め」で推移する。

※ 平年並＝平年値±0.5℃程度、（やや高め、やや低め）＝平年値±1.0℃程度、
（高め、低め）＝平年値±1.5℃程度、（極めて高め、極めて低め）＝平年値±2.5℃以上

経過（2015年7月～2015年12月）（注：経過は図2を参照のこと）

(1) 黒潮

- ・7月中旬、N型からB型になった。
- ・7月下旬、房総沖にある冷水域の南を迂回して流れる流路となった。
- ・8月中旬にC型となったが、流路変動は大きかった。
- ・9月は安定してC型で推移した。
- ・10月以降、流路変動を伴いながら次第に蛇行規模を縮小した。
- ・11月中旬、N型になった。
- ・12月上旬、B型になった。

(2) 薩南～房総沿岸域

◎薩南海域

- ・黒潮北縁の月平均位置は、7月は接岸、8月～9月は屋久島南付近の平均的な位置、10月～11月は接岸で推移した。

◎潮岬以西

- ・都井岬沖にあった小蛇行が、7月下旬～8月下旬に足摺岬～潮岬沖を東進した。
- ・以降は、都井岬～潮岬沖では「接岸」～「やや離岸」で推移した。

◎潮岬以東

- ・8月中旬～11月中旬、熊野灘～遠州灘～伊豆諸島北部海域は概ね冷水域に覆われた。
- ・8月上旬～中旬、伊豆諸島北部海域から遠州灘へ暖水の波及が見られた。
- ・9月、遠州灘～熊野灘沖に暖水域が見られた。
- ・10月～11月、熊野灘に断続的に暖水舌が見られた。
- ・11月中旬、伊豆諸島北部海域から駿河湾へ暖水の波及が見られた。
- ・伊豆諸島南部海域は、8月上旬までは黒潮の南の暖水域に覆われていた。8月中旬～11月上旬は概ね冷水域に覆われたが、11月中旬には暖水域となった。
- ・野島崎沖での黒潮は、7月～8月は離接岸を繰り返していたが、9月～11月は離岸で推移し、12月上旬に接岸した。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・7月～10月、沖合域に黒潮が見られ、暖水の影響が強かった。
- ・11月、沖合域から黒潮系暖水が波及した。

現況 (2015年12月15日現在)

(1) 黒潮

- ・ B型流路である。

(2) 薩南～房総沿岸域

◎潮岬以西

- ・ 黒潮は、都井岬沖で「接岸」、足摺岬～室戸岬沖で「やや離岸」、潮岬沖で「接岸」している。

◎潮岬以東

- ・ 熊野灘～伊豆諸島北部海域に、黒潮内側反流が形成され暖水が波及している。
- ・ 伊豆諸島南部海域は、黒潮の南の暖水域に覆われている。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 黒潮系暖水の影響が弱まった。

※ 黒潮の離接岸に関する語句表記は、川合英夫(1972)：海洋物理Ⅱ、東海大学出版会に準じた。

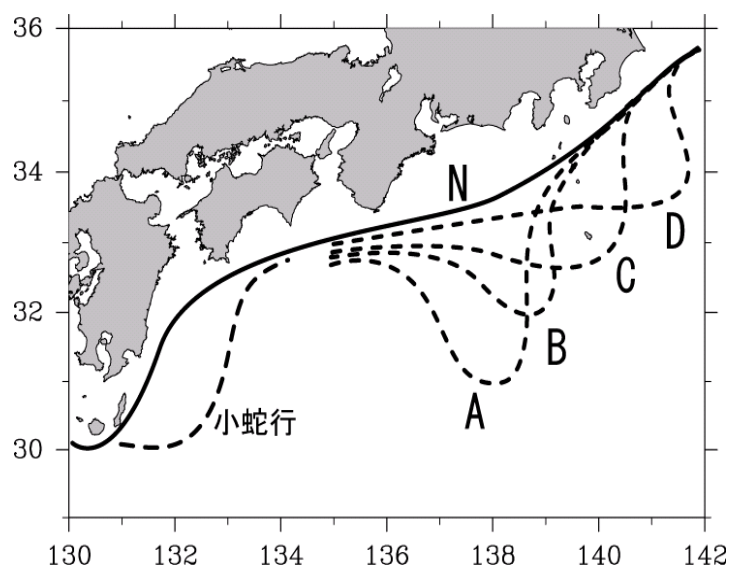


図1 黒潮流型の分類

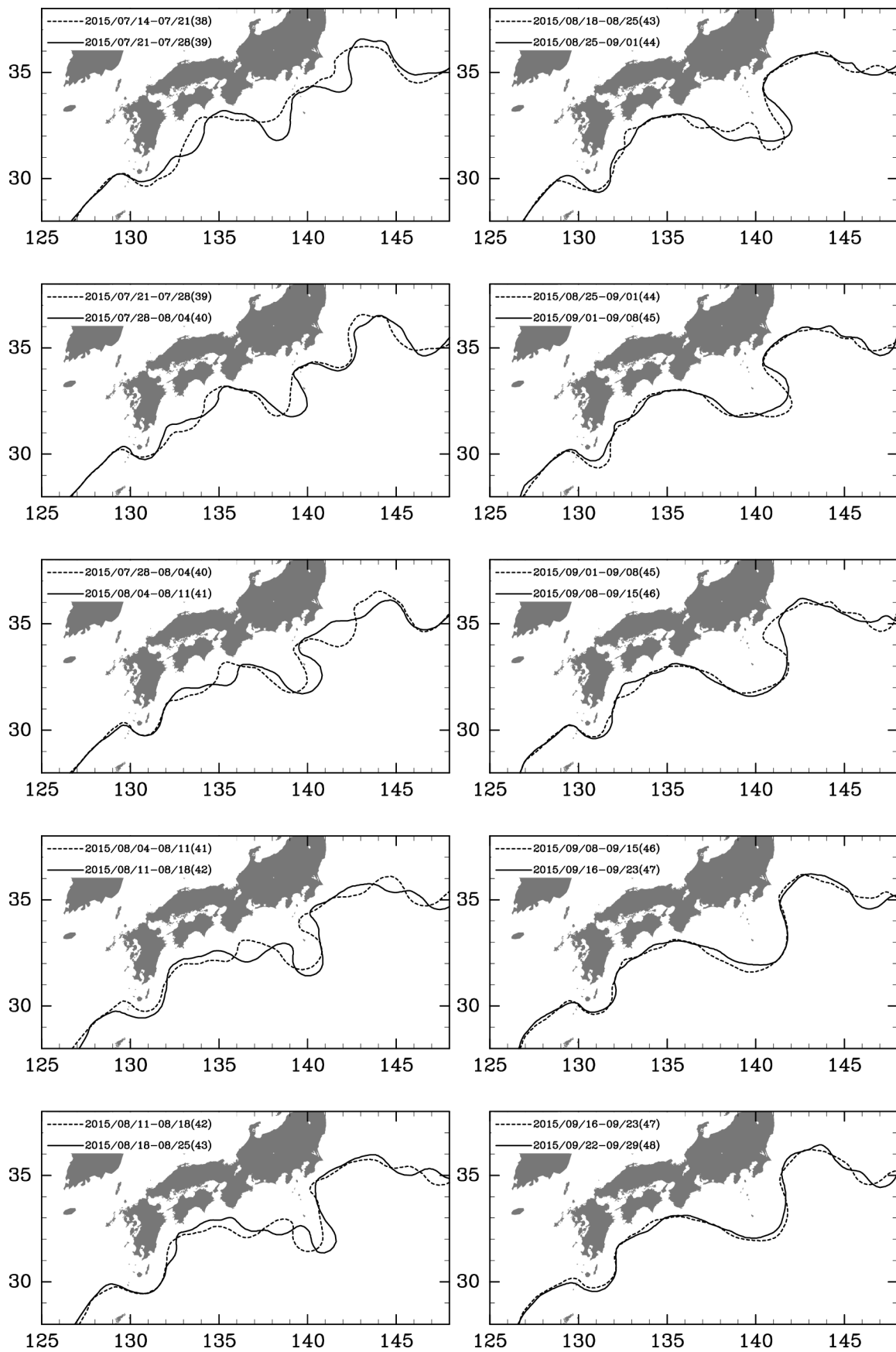


図2 黒潮流軸のパターン

(2015年7月~2015年12月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

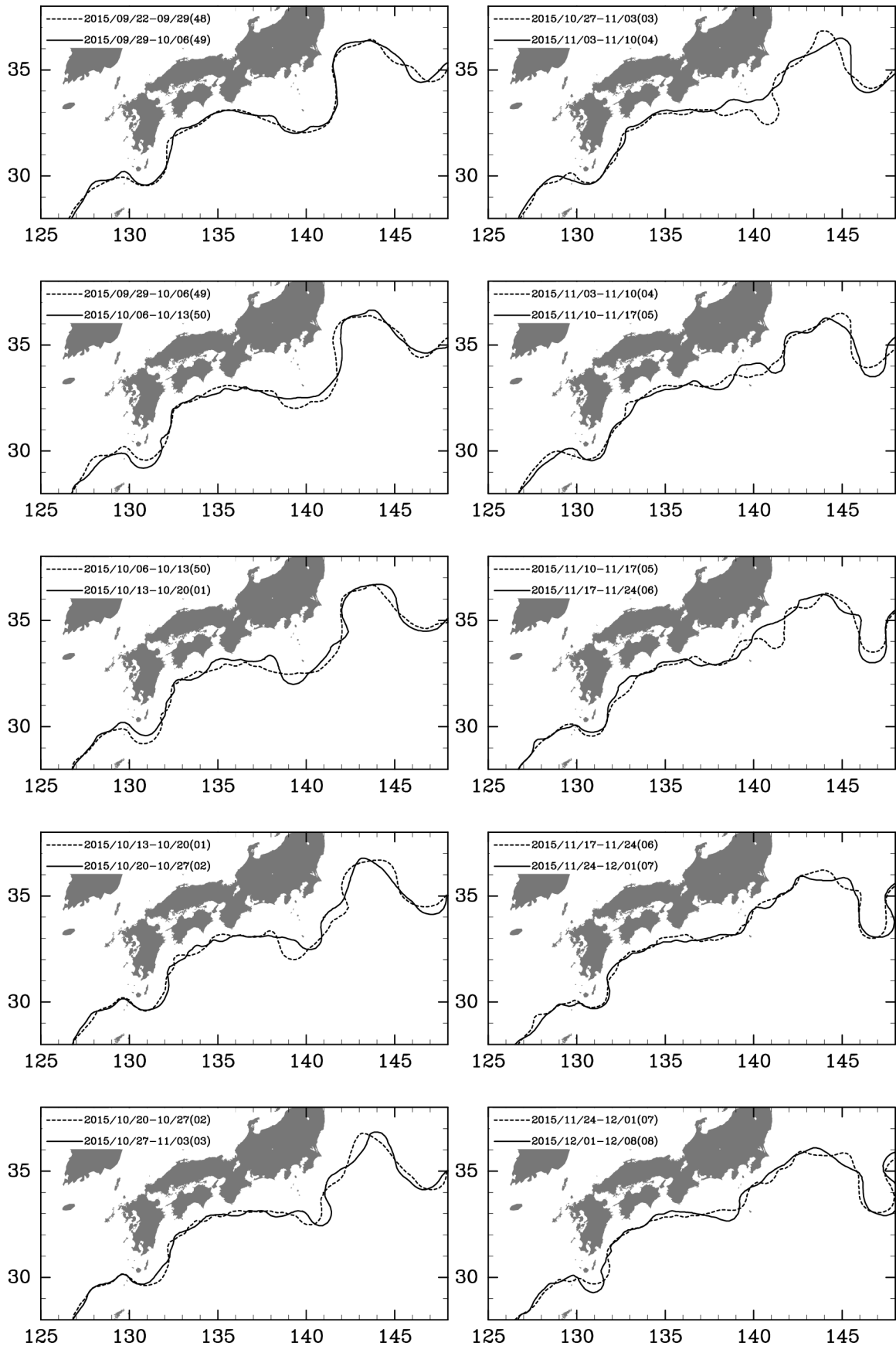


図2 (つづき) 黒潮流軸のパターン

(2015年7月~2015年12月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

マイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2016（平成28）年1月～6月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚（2016（平成28）年級群）、1歳魚（2015（平成27）年級群）、2歳魚（2014（平成26）年級群）、3歳（2013（平成25）年級群）以上。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 北薩～熊野灘（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩、薩南海域は前年を上回る。日向灘では前年並。豊後水道南部では前年を上回る。宿毛湾、土佐湾は好漁であった前年並。紀伊水道外域では前年並～上回る。熊野灘では前年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：北薩～土佐湾では、期前半は16 cm～20 cm 前後（1歳以上）、期後半は7 cm～12 cm 前後（0歳魚）主体。紀伊水道外域～熊野灘では13 cm 以上（1歳以上）。

2. 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

(1) 来遊量：伊勢・三河湾では前年並。駿河湾、相模湾西部では前年並～上回る。相模湾東部では前年を上回る。

(2) 漁期・漁場：伊勢・三河湾では4月以降、駿河湾、相模湾西部では2月以降、相模湾東部では期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：伊勢・三河湾では10 cm 以下（0歳魚）主体。駿河湾、相模湾では13 cm～15 cm（1歳魚）主体。

3. 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：前年を上回る。

(2) 漁期・漁場：まき網の漁場は、1月は房総～常磐南部海域、2月以降犬吠埼周辺海域～鹿島灘で形成される。5月には常磐海域～仙台湾、6月には三陸南部海域に広がり、まとまった漁場形成がある。仙台湾～三陸南部海域の定置網では2月まで、および5月以降漁獲される。

(3) 魚体：13 cm～17 cm 前後（1歳魚）主体に18 cm～22 cm 前後（2歳以上）が混じる。

漁況の経過（2015年7月～12月）および見通し（2016年1月～6月）についての説明

1. 資源状態

マイワシ太平洋系群の資源量は、1970年代後半に増加し、1980年代は1千万トン以上の高い水準で推移したが、1990年代に入って減少して1994年に100万トンを下回り、1999年までは70万トン～90万トン台で推移した後再び減少し、2002年以降2007年まで10万トン台の低い水準で推移した。その後2008年～2013年に比較的良好な加入が続いたことと漁獲圧が低下したことにより増加し、2014年は90万トン以上になったと推定されている。

2012年級群（4歳魚）以上の年級群は残存資源が減少しており漁獲対象とならない。

2013年級群（3歳魚）は、0歳魚時点で、秋季北西太平洋中層トロール調査（中央水研）による道東海域～千島沖の亜寒帯域現存量が66億尾と2012年（57億尾）をやや上回ったが、2010年（153億尾）、2011年（74億尾）を下回った。前期も2歳魚としての漁獲状況は前年同期を下回っており、今期も3歳魚として漁獲対象になるが来遊量は前年を下回ると考えられる。

2014年級群（2歳魚）は、0歳魚時点で、秋季北西太平洋中層トロール調査（中央水研）による道東海域～千島沖の亜寒帯域現存量が119億尾と、2011年級～2013年級を上回り、2010年級（153億尾）に次ぐ水準となるなど高い値を示した。未成魚越冬群資源量指数は2.065と、2011年級群～2013年級群を上回り、2010年級群（3,374）に次ぐ高い水準と評価されている。また各地での0歳魚としての漁獲量が多く、三重県～愛知県で2014年夏季以降近年にない好漁となった。これらのことから2014年級群の加入量水準は高く、本年7月の評価では加入量119億尾と推定されている。今期は2歳魚として漁獲対象となり、来遊量

は前年同期を上回ると考えられる。

2015年級群（1歳魚）に対応する産卵量は160兆粒（2015年6月までの暫定値）と、2014年（452兆粒）を下回ったものの、2011年以降の高い水準を維持している。マシラスは、前期までの漁獲量が特に渥美外海～駿河湾で前年を大きく上回るなど多く出現している。幼魚は、日向灘～土佐湾の沿岸域で多かった前年を上回る漁獲が見られた。沖合域の調査では、2015年5月～6月の移行域幼稚魚調査（中央水研）に基づく加入量指数が101.5と、近年では2012年～2014年（123.2～158.0）を下回ったことから、7月の評価では71億尾と中程度の水準と判断したが、その後9月～10月の秋季北西太平洋中層トロール調査において、マイワシ0歳魚が非常に多く漁獲され、CPUE中央値および計量魚群探知機による現存量はそれぞれ前年から一桁増加した。このことから、現時点での1歳魚の加入量水準の見積もりは不確実であるが、2015年級群の加入量水準は、2010年級群、2014年級群を上回る高い水準と判断され、今期の漁獲の主体となると考えられる。

2016年級群（0歳魚）については現時点ではその水準を予測できない。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

(1) 北薩～熊野灘（まき網、定置網）

・来遊量：北薩、薩南海域では4月まで1歳魚（2015年級群）主体となる。前期10月以降、0歳魚（2015年級群）が前年を大きく上回る漁獲が継続していることから、来遊量は前年を上回る。日向灘では5月まで1歳以上が主体となる。漁獲動向が一致する三重県・高知県・鹿児島県の前期まき網漁獲量の相乗平均は前年を上回ったものの、鹿児島県の漁場は西側に偏っており日向灘への来遊にはつながらないと考えられる。また三重県の漁獲量は前年を下回っている。しかし高知県の漁獲量は前年を大きく上回っており、これらの来遊が見込めることから、今期の来遊量は前年並と予測される。

豊後水道南部では前期の0歳魚の漁獲量が前年を大きく上回っていることから来遊量は前年を上回る。

宿毛湾、土佐湾では、前期の0歳魚の漁況が好調であり、また周辺海域の来遊量も高水準であることから、今期の来遊量は好調であった前年並と考えられる。

紀伊水道外域では、前期の漁獲量が前年を下回ったものの、主体となる1歳魚（2015年級群）、2歳魚（2014年級群）の資源水準が比較的高いと推定されていることから、全体として前年並～上回ると予測される。

熊野灘では、前期の漁獲主体は例年どおり0歳魚（2015年級群）で、前年好漁であった2014年級群（1歳魚）の来遊は多くはなく、漁況は前年を大きく下回っている。また、太平洋系群の主体であり、来遊の如何によっては熊野灘の漁況に大きな影響を与える沖合加入群は、現在房総沖にまで南下しておらず、まとまった来遊が期待できる状況ではない。以上から、今期の来遊量は、近年ではきわめて好漁であった前年を下回ると考えられる。

・漁期・漁場：各海域とも期を通じて漁獲される。

・魚体：北薩、薩南海域では4月までは16cm～18cmの1歳魚、5月以降は9cm～12cmの0歳魚が主体となる。日向灘では5月までは18cm～19cmの1歳魚以上、5月以降は9cm～12cmの0歳魚が主体となる。豊後水道南部、宿毛湾、土佐湾では3月までは20cm前後の1歳魚、2歳魚、4月以降は7cm～12cm前後の0歳魚が主体となる。紀伊水道外域～熊野灘では13cm～19cmの1歳魚と20cm以上の2歳魚以上が漁獲される。

(2) 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

・来遊量：伊勢・三河湾の今期の主な漁獲対象は0歳魚（2016年級群）である。沿岸域の資源水準は低くはないと推定されるが、近年の来遊状況から6月までに高い来遊量は見込まれず前年並となる。駿河湾、

相模湾では1歳魚（2015年級群）が主体となる。駿河湾、相模湾西部では前期の漁況は全般に前年を下回って低調であったが、相模湾東部では前期の0歳魚（2015年級群）の漁獲は好調であり、資源水準は高いと判断される。したがって来遊量は駿河湾、相模湾西部では前年並～上回り、相模湾東部では前年を上回ると考えられる。

・漁期・漁場：伊勢・三河湾では4月以降、0歳魚が漁獲される。駿河湾、相模湾西部では2月以降まき網で漁獲される。相模湾東部では期を通じて漁獲される。伊豆諸島海域のサバ棒受網・たもすくいで混獲がみられる。

・魚体：伊勢・三河湾では10 cm以下の0歳魚が主体となる。駿河湾、相模湾では13 cm～15 cmの1歳魚主体となる。

(3) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

・来遊量：各年級群の資源状態と近年の漁獲状況から、今期の漁獲対象は1歳魚（2015年級群）主体で2歳（2014年級群）以上が混じる。今期の1歳魚となる2015年級群は、0歳魚時の2015年10月以降、房総以北海域で漁獲がみられるようになっており、また秋季北西太平洋中層トロール調査の結果から、近年では加入量水準の高い年級群と考えられ、今後の漁獲の主体となると考えられる。2歳（2014年級群）以上は、前期の道東海域でまとまった漁獲がみられ、今期も漁獲対象となり得る残存資源量が見込まれる。これらから、来遊量は前年を上回ると考えられる。

・漁期・漁場：まき網の漁場は、1月は南下群を対象に房総～常磐南部海域で漁場が形成される。2月以降は犬吠周辺～鹿島灘海域で漁場が形成される。期後半にはさらに常磐海域～仙台湾にも形成され、6月には三陸南部にも広がり、まとまった漁場形成がある。定置網は、仙台湾～三陸南部海域では2月まで、および5月以降に、道南の渡島南部海域では5月以降に入網がみられる。

・魚体：期前半は13 cm～15 cm前後、4～6月は15 cm～17 cm前後の1歳魚主体となり、18 cm～20 cm前後の2歳魚と20 cm～22 cm前後の3歳魚以上が混じる。

カタクチイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2016（平成28）年1月～6月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚（2016（平成28）年級群）、1歳魚（2015（平成27）年級群）、および2歳魚（2014（平成26）年級群）。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 北薩～紀伊水道外域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩～薩南、日向灘では前年並。豊後水道西側では前年を下回る。豊後水道東側～土佐湾では前年を上回る。紀伊水道外域ではまとまった漁獲がない。

(2) 漁期：全期間。

(3) 魚体：11 cm以下（1歳魚）および12 cm以上（2歳魚）。

2. 熊野灘～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

(1) 来遊量：熊野灘では前年を下回る。伊勢・三河湾～渥美外海では前年並。駿河湾では前年並～下回る。相模湾では前年を下回る。

(2) 漁期：全期間。伊勢・三河湾～渥美外海では4月以降に漁獲がある。

(3) 魚体：伊勢・三河湾～渥美外海および相模湾では12 cm以下（1歳魚）主体。その他の海域では11 cm～14 cm（1歳魚、2歳魚）。

3. 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：房総～三陸南部海域では前年を下回る。三陸北部海域、道東海域ではまとまった漁獲がない。

(2) 漁期・漁場：まき網は鹿島灘～房総海域で全期間。三陸南部海域の定置網は2月までと5月以降。

(3) 魚体：8 cm～11 cm（1歳魚）主体。

漁況の経過（2015年8月～11月）および見通し（2016年1月～6月）についての説明

1. 資源状態

カタクチイワシ太平洋系群の推定資源量は1998（平成10）年から2010（平成22）年まで70万トン～150万トンで推移し、2014（平成26）年の資源量は62万トンと推定された。資源水準は過去30年で中位、動向は5年間で減少傾向である。本系群は漁場が形成される沿岸域だけでなく黒潮親潮移行域まで広く分布する。

2014年級群（2歳魚）は、2014年漁期に西日本海域で多獲されたが、その後の漁獲に反映されていない。2015年の北西太平洋サンマ資源調査（東北水研、6月～7月）および同年の秋季北西太平洋中層トロール調査（中央水研、9月～10月）において、10 cm以上の魚体で漁獲され、現存量、有漁点（漁獲のあった調査点）CPUEはいずれも低水準であった。2015年6月の道東海域流し網調査（釧路水試）において、CPUEは前年を上回ったものの低水準であった。また、2014年11月～2015年6月の常磐・房総海域での11 cm以下（1歳魚主体）の漁獲量は5千トンで、前年

(16千トン)を下回った。これらの動向から、2014年級群は最近10年の中で見れば低水準と考えられる。

2015年級群(1歳魚)は、伊勢湾以東を中心とした1月～6月のシラス漁況が好調で前年を上回った。0歳魚を主たる対象とする2015年秋季の房総沿岸2そうまきの漁獲量は前年を下回り、2015年6月の道東海域流し網調査(釧路水試)において0歳魚(2015年級群)は採集されなかった。沖合域では、2015年の北西太平洋サンマ資源調査(東北水研、6月～7月)における9 cm以下の推定現存尾数が2001年以降最低であり、2015年の秋季北西太平洋中層トロール調査(中央水研、9月～10月)における9 cm以下の有漁点CPUEは、前年を上回ったものの非常に低い水準であった。以上の状況から、2015年級群のうち沖合回遊群は低水準と考えられるが、沿岸発生群は、現段階では総合的な水準判断が困難である。

2016年級群(0歳魚)は、現時点ではその水準を予測できない。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

(1) 北薩～紀伊水道外域(まき網、定置網)

北薩～薩南海域では、9月以降のまき網の漁況は前年を下回っているが、周辺海域のバッチ網漁業の秋漁は好調に推移していることから、前年並の来遊がある。日向灘では、近年、まき網における上半期漁況について、前年10月～12月の宿毛湾の中型まき網による漁獲動向との間に関係がみられる。宿毛湾の中型まき網による漁獲量は低調であった前年同期を若干上回った程度であるため、来遊量は前年並と予測される。豊後水道西側では、漁獲の主体となる1歳魚(2015年級群)が、2015年9月以降の漁況で前年を下回っていることから、今期は前年を下回る。豊後水道東側では、不確実性は高いものの、豊後水道外海から来遊すると考えられる2歳魚(2014年級群)の資源量が前年(2013年級群)を上回っていると評価されていること、2015年8月～11月のカタチシラスおよびまき網による0歳魚の水揚量が前年並であったことから、不漁であった前年を上回る。宿毛湾、土佐湾では、宿毛湾における小型まき網の漁獲状況が前年を上回っていることから、不確実性は高いものの低調であった前年を上回る。紀伊水道外域では未成魚・成魚は主たる漁獲対象ではないため、まとまった漁獲はない。

(2) 熊野灘～相模湾(まき網、定置網、船曳網)

冬季に熊野灘に来遊する大型成魚は、道東～常磐・房総海域から回遊を行う群れであると考えられる。2015年の秋季北西太平洋中層トロール調査(中央水研、9月～10月)による分布状況や常磐・房総海域への南下が前年より遅れている状況から、今期の来遊量は前年を下回る。伊勢・三河湾～渥美外海では、漁獲の主体となる1歳魚(2015年級群)について、2015年秋季のシラス漁況が好調であったことから、地先周辺に起源をもつ魚群の資源量が多いと考えられるが、前年並と予測される。駿河湾では、今期の漁獲主体は、道東～常磐・房総海域より南下回遊する1歳魚(2015年級群)および2歳魚(2014年級群)であるが、1歳魚および2歳魚の資源量は低水準であると推定されていることから、来遊量は前年並～下回る。相模湾では、沖合域から来

遊する1歳魚（2015年級群）、2歳魚（2014年級群）が漁獲の主体となると考えられるが、資源水準が低いと推定されていることから前年を下回る。

（3）房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

2015年秋季北西太平洋中層トロール調査（中央水研、9月～10月）では、東経155度～166度の親潮域にカタクチイワシが広く分布したが、推定0歳魚（2015年級群）および推定1歳魚（2014年級群）のCPUEは非常に低い水準であった。

2014年11月～2015年6月の常磐・房総海域における漁獲量（千葉県、茨城県、福島県の合計）は10千トンで、前年（28千トン）を下回った。このうち、1歳魚（2014年級群）と想定される11 cm以下の小型魚の漁獲量は5千トンで、前年（16千トン）を下回った。このように、2014年級群の残存資源量は、前年の2013年級群より少ないと考えられる。常磐・房総以北の海域で、例年2月頃まで漁獲の主体のとなる12 cm以上の大型成魚の来遊量は、直近の漁況から判断して非常に少ない。また、2015年級群は秋季北西太平洋中層トロール調査（中央水研、9月～10月）において、非常に低い水準であったと推定されている。以上から、常磐・房総海域の来遊量は前年を下回る。

仙台湾～三陸南部海域の定置網では、2月まで南下群が、また5月以降に常磐・房総海域からの北上群の一部が来遊し、2歳魚および1歳魚）が漁獲される。今期は2歳魚（2014年級群）および1歳魚（2015年級群）の資源水準が低いと考えられることから、来遊量は前年を下回る。

三陸北部海域、道東海域への今期の来遊は少なく、定置網でのまとまった漁獲はない。

ウルメイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2016（平成28）年1月～6月）

対象海域：北薩～熊野灘

対象漁業：まき網、定置網、棒受網、多鈎釣

対象魚群：0歳魚（2016（平成28）年級群）、1歳魚（2015（平成27）年級群）、2歳魚（2014（平成26）年級群）。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

(1) 来遊量：北薩および薩南、日向灘では前年を上回る。

宿毛湾、土佐湾、熊野灘では前年並～上回る。

豊後水道西側、紀伊水道外域では前年並。

豊後水道東側では前年を下回る。

(2) 漁期：全期間

(3) 魚体：前半は1歳魚（10 cm～20 cm）が主体であり、後半に0歳魚（10 cm以下）が加入する。

漁況経過（2015年7月～11月）および見通し（2016年1月～6月）についての説明

1. 資源状態

本系群の資源状態について、産卵調査結果から算出した産卵量（日向灘～潮岬：海区III）により評価した。過去36年間（1979年～2014年）の年間産卵量（前年9月～当年8月、海区III）から2014年の資源水準は高位、最近5年間（2010年～2014年）の産卵量から、動向は増加と判断した。

産卵量（海区III）は1978年以降、増減を繰り返しながらも全体としては増加傾向にある。1990年代前半までは20兆粒～60兆粒の範囲であったが、2007年は過去最高の139兆粒に及んだ。2008年は減少したが、2009年以降は80兆粒～100兆粒の範囲にあり、2014年は101兆粒であった。2015年は104兆粒と見込まれる。

過去36年間（1979年～2014年）の年間産卵量（海区III）の最大値（139兆粒）と最小値（21兆粒）の間を三分し、高位、中位、低位の水準を定義すると、高位と中位の境界値は99兆粒、中位と低位の境界値は60兆粒となる。2014年の産卵量（101兆粒）は高位と中位の境界値を僅かに上回っていることから、資源水準は高位と判断した。なお、2015年の産卵量（海区III）予測値も高位にある。

最近5年間（2010年期～2014年期）の産卵量（海区III）から、動向は増加と判断した。

2014年の漁獲量（鹿児島県～三重県）は54千トンであり、2011年～2013年に引き続いて過去約30年間で最高水準にある。

2. 来遊量、漁期・漁場

2016年前期（1月～6月）は1歳魚（2015年級群）主体の漁況になることが推測されるため、2015年後期（7月～11月）の漁況等から、来遊量を予測した。2016年前期（1月～

6月)の後半には0歳魚(2016年級群)も加入するが、現時点では予測根拠となる情報は得られない。

予測対象海域に相当する鹿児島県～三重県の主要港における前期(1月～6月)水揚量と後期(8月～12月)水揚量には、強い正の関係がある。一方、後期(7月～11月)水揚量と翌年前期(1月～6月)水揚量にも、弱いながらも統計的には有意な正の関係がある。2015年後期(7月～11月)の水揚量は29千トンであった。2000年～2014年の後期(7月～11月)水揚量と翌年前期(1月～6月)水揚量の間を用いると、2016年前期(1月～6月)の水揚量は11千トンと予測され、この値は水準としては決して低くない。しかし、2015年前期の水揚量(15千トン)は過去の後期(7月～11月)水揚量と翌年前期(1月～6月)水揚量の間から予測される値を大きく上回る結果であったため、この関係を基にすれば、2016年前期(1月～6月)は、海域全体としては、豊漁であった前年を下回ると予測されることになる。しかしながら、後期(7月～11月)水揚量と翌年前期(1月～6月)水揚量の間には非常に大きなばらつきがあり、さらに、下記のように前年並～上回る海域が多いことを考慮し、海域全体としても前年並～上回ると予測する。

北薩および薩南海域では、1歳魚(15cm～20cm)が主体で、4月以降は0歳魚(8cm～10cm)が混じる。2015年級群は、9月までは低調に推移していたが、10月以降前年を大きく上回る漁獲が続いているため、近年ではやや低調であった前年を上回る来遊があると考えられる。

日向灘では、1月～5月は1歳魚(18cm～20cm)、6月は0歳魚が主体となる。本海域の漁獲量は、前年後期(7月～12月)の鹿児島県主要4港のまき網漁獲量と動向が一致する傾向にあり、2015年11月までの鹿児島県漁獲量が前年同期を上回っていることから、1月～5月の1歳魚は前年を上回ると予測される。一方、6月以降の0歳魚は現段階では予測不可能。

豊後水道西側では、1月～3月は1歳魚(15cm～20cm)、4月～6月は0歳魚(10cm前後)が主体となる。1月～3月に漁獲の主体となる1歳魚は、2015年4月～11月のまき網漁獲量が前年を下回ったことから予測期間中の来遊は低水準と予測できる。しかし、今年はマイワシ資源の増加によりウルメイワシへの漁獲努力量が減少した可能性を考慮し、来遊量は前年並と予測される。

豊後水道東側では、1歳魚(15cm～20cm)、0歳魚(5cm～10cm)が主体となる。愛媛県および周辺海域において、産卵親魚になり得る2015年級群の水揚量が前年同期と比べて好調であることから、1歳魚の来遊量は前年同期を上回ると予測される。しかし、前年6月の0歳魚(2015年級群)主体の水揚量は過去に例の無い高水準であったため、全体としては前年を下回ると予測される。

宿毛湾および土佐湾では、1歳魚、0歳魚が主体となる。漁況の経過から、今期の主体となる1歳魚の来遊量は、前年並と考えられる。漁期後半には、0歳魚も来遊すると考えられるが、その水準は不明である。近隣海域における1歳魚の来遊量が前年を上回っていることから、来遊量は前年並～上回ると予測される。

紀伊水道外域西部では、標本漁協における漁獲量から判断して、来遊量は前年並と予測される。

紀伊水道外域東部では、2012年以降、紀伊水道外域東部から熊野灘南部における1そうまき網の漁獲量は好調に推移してきた。また、太平洋系群全体の資源動向も考慮し、来遊量は前年並と予測される。

熊野灘では、1歳魚（11 cm～20 cm）及び2歳以上（20 cm～）が主体となる。2015年秋季には大型成魚がまとまって来遊したこと、来季2歳魚となる2014年級群は0歳時に特異的な好漁をもたらしたことから、大型成魚の資源量は前年を上回ると考えられる。一方、明け1歳魚は、前期の漁況から前年より大幅に少ないと判断される。以上より、1歳魚は前年を下回り、2歳以上は前年を上回る。総じて来遊量は前年並～上回ると予測される。

マアジ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2016（平成28）年1月～6月）

対象海域：北薩～熊野灘、相模湾

対象漁業：まき網、定置網

対象魚群：0歳魚（2016（平成28）年級群）、1歳魚（2015（平成27）年級群）、
2歳魚（2014（平成26）年級群）、3歳魚（2013（平成25）年級群）、
4歳魚（2012（平成24）年級群）。年初に加齢。魚体は尾叉長。

1. 北薩～土佐湾（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：北薩～日向灘～豊後水道南部西側では前年並。豊後水道南部東側～土佐湾では前年を下回る。
- (2) 魚体：主体となる1歳魚は15 cm～22 cm、2歳魚は22 cm～26 cm、期の後半に加わる0歳魚は14 cm以下。

2. 紀伊水道外域～熊野灘（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：紀伊水道外域西部は前年並、紀伊水道外域東部は前年を上回る。熊野灘は前年並～下回る。
- (2) 魚体：紀伊水道外域西部・熊野灘で主体となる1歳魚は15 cm～22 cm。紀伊水道外域東部で主体となる2～4歳魚は24 cm～34 cm。期の後半に加わる0歳魚は14 cm以下。

3. 相模湾（定置網）

- (1) 来遊量：全体として前年並。
- (2) 魚体：主体となる1歳魚は15 cm～22 cm。期の後半に加わる0歳魚は14 cm以下。

漁況の経過（2015年7月～11月）および見通し（2016年1月～6月）についての説明

1. 資源状態

資源量は1986年以降増加し、1990年代半ばは15万トン～16万トンと高い水準で推移したが1997年以降減少し、2009年以降は横ばいで推移した。加入量は1993年をピークに減少し、2009年以降3.6億尾～7.3億尾と低い水準で推移している。現在の資源量は6万トン～7万トン程度であり、資源水準は中位、動向は横ばいと判断される。

2012年級群（4歳魚）の加入量は5.9億尾と評価されており、2015年秋季には3歳魚として紀伊水道外域で漁獲対象となったが、残存資源は少ない。

2013年級群（3歳魚）の加入量は5.0億尾と評価されている。近年の3歳魚としては、資源量水準は高くないと考えられ、2歳魚（2014年級群）とともに漁獲されるが残存資源は少ない。

2014年級群（2歳魚）は今期0歳魚とともに漁獲の主体となると考えられるが、これまでの漁況は多くの海域で極めて低調に推移しており、2015年度評価では前年2013年級群を下回り過去最低水準の3.6億尾と推定されている。

2015年級群（1歳魚）は、いずれの海域でも漁獲対象になる。加入量の指標となる各県地先の漁獲状況は、4月～11月の8か月間で比較した場合、宮崎県南部定置網アジ仔CPUE、宇和島港ゼンゴCPUEおよび宿毛湾ゼンゴ資源量指数は前年同期を下回り、伊勢湾豆板漁業当歳魚漁獲量、串本棒受網当歳魚漁獲量、伊豆東岸定置網当歳魚漁獲量は前年をわずかに上回ったものの低水準である。これらのことから、2015年級群の加入量水準は、極めて低水準であった前年（2014年級群）

並と考えられる。

2016年級群(0歳魚)は、いずれの海域でも今期の後半に漁獲対象になるが、現時点では予測根拠となる情報は得られない。

2. 来遊量、漁期・漁場

本魚種は予測期間を通じて漁獲対象となる。来遊量については、海域ごとに、前期の漁況に基づき予測した。年齢別体長は、これまでの体長組成の推移から概ね次のとおりである。0歳魚：14 cm以下、1歳魚：15 cm～22 cm、2歳魚：22 cm～26 cm、3歳以上：25 cm以上。3歳以上は、現状では年齢に対応した体長区分は困難である。

(1) 北薩～土佐湾

いずれの海域も今期は1歳魚(2015年級群)が主体となる。期の終盤に0歳魚(2016年級群)が混じる。

北薩～薩南海域では主体となる1歳魚(2015年級群)の来遊量は、2015年8月～11月の0歳魚時の漁獲状況が前年同期と同様に推移していることから、前年並と考えられる。2歳魚以上は、近年低調に推移していることから、来遊量は全体として前年並と考えられる。

日向灘の1月～6月の漁獲量は、前年下半期の日向灘・愛媛県・高知県のまき網漁獲量による指標値(3指数の相乗平均)と正の相関関係がみられ、この指標値が前年並であったことから、今期の来遊量は前年並と予測される。

豊後水道南部西側では、2015年8月～11月のまき網漁獲量(0歳魚主体)が前年並であったことから、今期の来遊量は前年並と予測される。

豊後水道南部東側では、2015年8月～11月の漁獲が低調であることから、来遊量は前年を下回ると予測される。

宿毛湾～土佐湾では、2015年7月～11月のまき網・定置網とも0歳魚(2015年級群)の漁獲量が前年を下回ったことから、今期1歳魚(2015年級群)の来遊量は前年を下回ると予測される。

(2) 紀伊水道外域～熊野灘

紀伊水道外域西部では、2015年7月～11月の漁獲量は前年同期を下回った。今期の主体となる1歳魚(2015年級群)の加入量水準は前年並と考えられ、7月以降の漁獲傾向から判断して来遊量は前年並と予測される。

紀伊水道外域東部の2015年7月～11月の1そうまき網・2そうまき網による漁獲量は1歳魚(2014年級群)～3歳魚(2012年級群)主体に前年を上回り、熊野灘南部の定置網、串本の棒受網は前年同期を下回った。紀伊水道外域東部では、今期も2歳魚～4歳魚主体に、低調であった前年を上回ると考えられる。

熊野灘への来遊量は近年極めて低調で推移しており、2015年7月～11月のまき網による主要3港の漁獲量は低調であった前年同期を下回り、1981年以降で過去最低となった。今期も前年を上回る来遊は見込めず、来遊量は前年並～下回ると予測される。

(3) 相模湾

伊豆東岸の定置網の2015年7月～11月のマアジ銘柄(1歳以上)の漁獲量は前年並であった。ジンダ銘柄(0歳魚、2015年級群)は極めて低調であった。西湘地区の2015年7月～10月の定置網漁獲量は前年並であった。今期は1歳魚(2015年級群)が主体となり、来遊量は前年並の低い水準と予測される。

(4) 房総海域～三陸南部海域の情報

北部太平洋まき網による2015年7月～11月の水揚量は845トン（水産庁による）と、前年同期（691トン）を上回ったものの、近年では極めて低調であった。本年は1 そうまきが好調なマサバを対象に操業を継続しており、マアジ漁場での操業が少なくなっていることも要因の一つと考えられる。宮城県の定置網における2015年7月～11月の漁獲量は589トンと前年（774トン）を下回った。岩手県・青森県では前年を上回ったが、数量はわずかである。

マサバおよびゴマサバ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2016（平成28）年1月～6月）

対象海域：薩南～豊後水道南部～土佐湾、紀伊水道外域、熊野灘、伊豆諸島周辺海域、犬吠～三陸海域

対象漁業：まき網、定置網、棒受網、たもすくい等

対象魚群：1歳魚（2015（平成27）年級群）、2歳魚（2014（平成26）年級群）、3歳魚（2013（平成25）年級群）、4歳魚（2012（平成24）年級群）、5歳（2011（平成23）年級群）以上。年初に加齢。魚体は尾叉長。

1. 薩南～豊後水道南部～土佐湾（まき網、定置網等）

- (1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバを主体とするサバ類全体としては、薩南～日向灘では前年並～下回る。豊後水道南部では前年並～上回る。宿毛湾～土佐湾では前年並。
- (2) 漁期：期を通じて漁獲される。
- (3) 魚体：ゴマサバが主な漁獲対象となる。薩南では32 cm～38 cm（2歳以上）主体に28 cm～32 cm（1歳魚）も。日向灘～豊後水道南部～土佐湾では、29 cm～36 cm（2歳魚、3歳魚）主体。

2. 紀伊水道外域（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：マサバ、ゴマサバともに前年を上回る。
- (2) 漁期：期を通じて漁獲される。
- (3) 魚体：マサバ、ゴマサバともに29 cm～36 cm（3歳魚、4歳魚）主体。

3. 熊野灘（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：マサバは前年を上回る。ゴマサバ2歳魚は前年を下回る。3歳魚は前年並。4歳魚は前年を上回る。5歳以上は前年を下回る。ゴマサバとしては前年並～下回る。サバ類全体としては前年並～上回る。
- (2) 漁期：期を通じて漁獲される。
- (3) 魚体：ゴマサバが主体となるがマサバの割合は前年より高まる。ゴマサバは29 cm～38 cm（3歳魚、4歳魚）主体。マサバは29 cm～36 cm（3歳魚、4歳魚）主体に22 cm～30 cm（1歳魚）も漁獲される。

4. 伊豆諸島周辺海域（棒受網、たもすくい）

- (1) 来遊量：マサバ2歳魚は前年を下回る。3歳魚は前年を上回る。4歳魚は前年を上回る。マサバとしては前年を上回る。ゴマサバ1歳魚は前年を下回る。2歳魚は前年並。3歳魚は前年を上回る。ゴマサバとしては前年並～上回る。サバ類全体としては前年を上回る。
- (2) 漁期・漁場：マサバは漁期当初は三宅島周辺海域、その後は伊豆諸島北部海域を中心に漁場が形成される。ゴマサバは期を通じて三宅島周辺海域が主漁場となるが、マサバに混獲される場合は伊豆諸島北部海域にも漁場が形成される。
- (3) 魚体：マサバは28 cm～32 cm（3歳魚）主体に32 cm～35 cm（4歳魚）も漁獲される。ゴマサバは28 cm～35 cm（2歳魚、3歳魚）主体に24 cm～27 cm（1歳魚）も漁獲される。

5. 犬吠～三陸海域（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：マサバ1歳魚は前年を下回る。2歳魚は前年を下回る。3歳魚は前年を上回る。4歳魚は前年を上回る。5歳魚は前年を下回る。マサバとしては前年並～下回る。ゴマサバは混獲される程度。サバ類全体としては多かった前年並～下回る。
- (2) 漁期・漁場：まき網では犬吠～常磐南部海域で期を通じて漁獲される。三陸南部海域の定置網では5月以降漁獲される。
- (3) 魚体：マサバは28 cm～32 cm（3歳魚）主体に20 cm～30 cm（1歳魚、2歳魚）も漁獲される。ゴマサバは23 cm～30 cm（1歳魚、2歳魚）主体に漁獲される。

漁況の経過（2015年7月～11月）および見通し（2016年1月～6月）についての説明

1. 資源状態

(1) マサバ

資源量は1990～2000年代に低い水準にあったが、近年の加入量水準の高い年級群の発生と漁獲圧の低下により資源量が増加している。

2011年級群（5歳魚）以上の残存資源量は少ない。

2012年級群（4歳魚）は、8月時点の資源評価（コホート解析）による推定加入尾数が16億尾と近年ではやや高い水準であり、残存資源量は近年の4歳魚としては多い。

2013年級群（3歳魚）は、推定加入尾数が63億尾と近年では極めて高い水準であり、これまで各地の漁獲物の主体となっている。残存資源量は近年の3歳魚としては卓越して多い。また、3歳魚としては平均体長がかなり小さく、成熟割合が低くなると考えられる。

2014年級群（2歳魚）は、調査船調査に基づく資源量指数により、加入量を近年では高い水準と推定した。これまでまき網、定置網漁業などで漁獲がみられているが多くなく、2013年級群の同時期を大きく下回っている。残存資源量は近年の2歳魚としては多い。また、2歳魚としては平均体長がやや小さく、成熟割合が低くなると考えられる。

2015年級群（1歳魚）は、8月時点の資源評価では、5月～7月の調査船調査の結果から加入量を近年の平均を下回る水準と推定した。秋季北西太平洋中層トロール調査の出現率は45.5%、平均CPUEは90.8尾/網であり、過去の同調査（15年間）において2013年を下回ったものの比較的高かった。加入量は近年の平均程度の水準と推定されるが不確実性は高い。

(2) ゴマサバ

資源量は1990年代後半以降高い水準にある。0歳時に黒潮一親潮移行域を回遊して加入する群が資源の主な部分を占めるようになっている。

2011年級群（5歳魚）の加入量水準は近年の平均程度の水準であり、残存資源量は高齢となって少なくなっている。

2012年級群（4歳魚）は、8月時点の資源評価（コホート解析）による推定加入尾数が15億尾と近年の平均を上回る水準である。

2013年級群（3歳魚）は、推定加入尾数が16億尾と近年の平均を上回る水準である。

2014年級群（2歳魚）は、調査船調査や漁業情報に基づく資源量指数により、加入量が近年の平均を上回る水準と推定した。これまでの各地漁業で漁獲されているが、1歳魚としての漁獲は2012年級群、2013年級群の同期を下回っている。

2015年級群（1歳魚）は、8月時点の資源評価では、5月～7月の調査船調査の結果から加入量を近年の平均程度と推定した。これまで各地で漁獲がみられているが、2013年級群、2014年級群の同時期を下回っている。静岡県棒受網CPUEによる資源密度指数（0歳時11月までの累計値）は571であり、2013年（3,036）、2014年（5,382）を大きく下回っている。三陸～道東海域流し網調査のCPUEは2013年、2014年を下回った。秋季北西太平洋中層トロール調査の出現率は18.2%、平均CPUEは5.0尾/網であり、過去の同調査（15年間）において出現率、CPUEともに比較的低かった。加入量は近年の平均を下回る水準と判断される。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

1) マサバ

(1) 来遊量

資源状態の項に前述の通り、これまで得られている情報から、1歳魚（2015年級群）は近年の平均程度の加入量水準と判断され、来遊量は前年を下回る。2歳魚（2014年級群）は近年では比較的高い加入量水準と判断されるが、来遊量は多かった前年を下回る。3歳魚（2013年級群）は近年では卓越して高い加入量水準であり、来遊量は前年を上回る。4歳魚（2012年級群）は近年ではやや高い加入量水準であり、来遊量は前年を上回る。5歳（2011年級群）以上は残存資源量が少なくなっているが、漁獲対象となる。マサバ全体としての来遊量は海域によって異なり、伊豆諸島以西では前年を上回り、犬吠以北では多かった前年並～下回る。

(2) 漁期・漁場、魚体

まき網漁場は、7月には犬吠海域～鹿島灘と、中旬以降には八戸沖にも形成された。9月中旬には道東海域で漁獲が本格化して10月下旬まで漁場が形成された。10月中旬になると三陸北部への南下が始まり、11月中旬に金華山周辺～常磐北部、同下旬に常磐南部にも漁場が形成された。7月～11月の犬吠以北海域におけるまき網による漁獲量は8.9万トンと前年同期（8.3万トン）並であった。千葉県以北の定置網等による漁獲量は4.0千トンと前年同期（5.3千トン）を下回った。伊豆諸島以西の海域では主に紀伊水道外域で漁獲され、漁獲量は3.2千トン（前年同期3.6千トン）であった。（漁獲量は各地主要港水揚げ資料および水揚げ物標本測定結果等からの推定値）

犬吠以北海域では、本予測期間は鹿島灘～犬吠海域が主漁場となると考えられる。伊豆諸島周辺海域では、漁場形成は黒潮流路変動に強く影響される。黒潮流路は1月まではC型で推移し、その後はN型になると予測され、C型の場合、北部海域（大室出しから利島、ヒョウタン瀬）は冷水塊に覆われ、北部海域での漁場形成の可能性は低い。N型に移行後は、北部海域への暖水波及が見込まれるため、北部海域での漁場形成の可能性が高い。熊野灘～紀伊水道外域ではマサバ主体の漁場形成もみられる。豊後水道南部～薩南ではゴマサバに混獲される程度となる。

年齢別尾叉長は、これまでの体長組成の推移、年齢査定の結果から概ね次の通りである。1歳魚（2015年級群）：28 cm以下、2歳魚（2014年級群）：25 cm～30 cm、3歳魚（2013年級群）：28 cm～32 cm、4歳魚（2012年級群）：32 cm～35 cm、5歳（2011年級群）以上：35 cm以上。

2) ゴマサバ

(1) 来遊量

資源状態の項に前述の通り、これまで得られている情報から、1歳魚（2015年級群）は近年の平均を下回る加入量水準と判断され、来遊量は前年を下回る。2歳魚（2014年級群）は近年の平均を上回る加入量水準と推定され、来遊量は前年並となる。3歳魚（2013年級群）は近年の平均を上回る加入量水準であり、来遊量は前年を上回る。4歳（2012年級群）以上は残存資源量が少なくなっているが、漁獲対象となる。ゴマサバ全体としての来遊量は海域によって異なり、薩南～日向灘、熊野灘では前年並～下回るが、豊後水道南部～土佐湾～紀伊水道外域、伊豆諸島周辺海域では前年並～上回る。犬吠以北海域では混獲される程度にとどまる。

(2) 漁期・漁場、魚体

7月～11月の漁況は、薩南では0歳魚（2015年級群）主体に前年を上回った。日向灘～駿河湾周辺では前年を下回った海域が多かった。伊豆諸島周辺海域では2歳魚（2013年級群）主体に前年を下回った。犬吠以北海域のまき網では、1歳魚～3歳魚を主な対象に前年を下回った。7月～11月の漁獲量は、薩南～紀伊水道外域は9.4千トン（前年同期実績8.7千トン）、熊野灘～伊豆諸島周辺海域は9.4千トン（同

20.1千トン)、犬吠以北海域のまき網は1.6万トン(同3.1万トン)、千葉県以北の定置網などが11.7千トン(同9.9千トン)であった。(漁獲量は各地主要港水揚げ資料および水揚げ物標本測定結果等からの推定値)

本予測期間における各地の漁期・漁場および魚体は、薩南では2歳(2014年級群)以上主体に1歳魚(2015年級群)も、日向灘～豊後水道南部～土佐湾では2歳魚、3歳魚(2014年級群、2013年級群)主体に、紀伊水道外域～熊野灘では2歳魚～5歳魚を主体に、期を通じて漁場が形成される。伊豆諸島周辺海域では2歳魚、3歳魚主体に1歳魚も対象に期を通じて三宅島周辺海域を中心に漁場が形成される。犬吠以北海域では1歳魚、2歳魚主体に犬吠海域～鹿島灘で漁獲される。

年齢別尾又長は、これまでの体長組成の推移、年齢査定の結果から概ね次の通りである。1歳魚(2015年級群):30cm以下、2歳魚(2014年級群):28cm～34cm、3歳魚(2013年級群):29cm～35cm、4歳魚(2012年級群):32cm～37cm、5歳(2011年級群)以上:33cm以上。

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	和歌山県水産試験場
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	徳島県立農林水産総合技術支援センター 水産研究課
岩手県水産技術センター	高知県水産試験場
宮城県水産技術総合センター	愛媛県農林水産研究所 水産研究センター
福島県水産試験場	大分県農林水産研究指導センター 水産研究部
茨城県水産試験場	宮崎県水産試験場
千葉県水産総合研究センター	鹿児島県水産技術開発センター
東京都島しょ農林水産総合センター	地方独立行政法人 大阪府立環境農林水産総合研究所 水産研究部 水産技術センター
神奈川県水産技術センター	香川県水産試験場
静岡県水産技術研究所	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
愛知県水産試験場 漁業生産研究所	(取りまとめ機関)
三重県水産研究所	国立研究開発法人 水産総合研究センター 中央水産研究所